



「わかること」と「できること」

2025年まであと6年4ヶ月程度となりました。平日は診療にあたりながら、週末を利用しての人材育成活動を続けてきました。もし、目の前に苦しんでいる人がいたとき、私たちに何ができるのか、多くの人に感心を寄せて頂き、誠実に対応できる人が増えていく必要があります。困れば119番をかけて救急搬送すれば良い時代ではなくなるからです。

とはいえ、日に日に弱っていく人と関わることは容易ではありません。どのように声をかけてよいかわからず、ただ励ますだけしかできないと考えている人がいます。本人が希望していなくても、食事の代わりに点滴や経管栄養など、人工栄養を与えなければいけないと考えている人もいます。

知識として何かを知っていることと、行動して具体的に関わることは異なります。ですから、必要なことは、“わかること”ではなく、具体的に援助として関わるのが、“できること”が必要です。そのためには、ある程度ロールプレイなどを通して具体的な関わり方を実践してみないとできるようにはなりません。そのような理由から、私は、60分程度の講演ではなく、最低3時間ほどの時間を頂くことを基本としています。知識として「わかる」のではなく、行動として「できる人」を増やしたいからです。そのためには、1対1の反復や沈黙の意味を学び、わかってくれる人として関わることや、援助を言葉にすることで、具体的に何をすれば良いか、実践できるようになることを期待しています。

市民公開講座は大切です。多くの人に考える機会を与えることになるでしょう。現在は、このテーマを伝えることができる仲間が増えています。エンドオブライフ・ケア協会では、地域学習会を教えることができる認定ファシリテーターが100名を越えました。このテーマを伝えることができるのは私だけではありません。

ですから、私は、このファシリテーターの皆さんが、市民公開講座や地域での講演会などで活躍できるようにと願っています。そして私の役割は、半日から2日間かけての人材育成にしっかり取り組むことと、地域での学習会を立ち上げるきっかけ作りと考えています。2025年まで、正月とお盆、GWとシルバーウィークを除けば、あと290回位

しか土日はありません。その限られた活動時間を大切に、与えられたミッションに心を込めて取り組んで行きたいと思います。 小澤竹俊

死の臨床研究会企画委員会主催 夏期セミナー

8月11日（土）午後、めぐみ在宅クリニック研修室で、死の臨床研究会年次大会企画委員会主催夏期セミナーを開催しました。全国から50名の参加者があり、4時間のワークショップを行いました。テーマは「死を前にした人にあなたは何かできますか？」を取り上げ、死の臨床研究会の事例検討を通して、援助を言葉にして、誠実に関わり続けるために何ができるのか、グループワークを行いました。そして、後半は1対1のロールプレイを行い、反復・沈黙の実際を体験しました。参加者の声を紹介します。「死を目前にしている人も、マイナスな感情をもっている人でも、支えがあることでプラスの感情に少しでもできる可能性があるということを知ることができました。私も仕事をする中で、人との繋がりや無縁の人に繋がりをつくる事は大事なことで改めて思いました。」「話を聴くという事、理解者になるという事のコミュニケーションを学べてよかったです。支えを強められる関わりをしていきたいと感じました。困難であることを苦手に感じていましたが、患者役になって負の言葉を発してもわかってもらえる間隔が体験出来て良かったです。」

企画委員会委員長の仕事も今年度いっぱいとなります。来年からはELC協会に特化した活動に専念する予定です。

診 療 実 績

	2006- 2017年	2018年 1-4月	2018年 5月	2018年 6月	2018年 7月	2018年 計	総計
訪問回数	60,113	2,512	880	946	964	5,302	65,415
自宅永眠	1,985	72	19	19	25	135	2,120
施設永眠	281	15	4	7	8	34	315
在宅 (自宅+施設)	2,266	87	23	26	33	169	2,435
病院永眠	594	34	13	11	7	65	659